



念腹句集

序

高濱 虚子

念腹君は昭和二年三月に日本を出帆して、ブラジルに渡航し、今日まで二十六年を経過した。その出発にあたりて私は左の三句を餞けした。

東風の船着きしところに国造り

鋏取って国常立の尊かな

畑打って俳諧国を拓くべし

虚子

風貌漠々たる念腹君は、その妻子や弟を連れて、漫

然として旅立って行くものの様に見えた。彼が果して移民団の一人として成功するものであらうか、どうであらうか、といふ事は予測する事が出来なかつた。又私にそれを予測する力も無かつた。只念腹君は新潟の片田合に在って俳句を作つてゐた。その俳句には異色があつた。力があつた。普通の俳人とは違つてゐると思つた。それ丈の事は知てゐた。そこで私はブラジルに渡つて土地を開拓する一人として努力はするであらうが、それよりもブラジルには恐らくまだ芽生えてゐないであらう俳譜の種を蒔き俳諧の畑を拓く事は必ず成功するであらうと考へて、これらの句を餞としたのであつた。「国づくり」と言つたのも銃を取つて国を征服せよといふのではない。「国常立の尊」といふのも国を創めた尊といふ意味ではない、俳諧の国をつくれ俳諧の畑を作れといふ意味であつた。俳句を愛好し俳句を作る人を養成せよといふ意味であつた。私は此の三句を以て念腹君の壮行を祝福したのであつた。

爾采二十六年移住民の一人としても相当な成功を収めつつあるといふ事を聞く。が、それよりも俳句を教へ俳句をひろめ、いわゆる俳諧国を打立てたと

いふ事に依って、念腹君のブラジルにおける功績は大いなるものがある様である。それによつて移住民の徳育美育の上には大いなる感化があるようである。その間に幾多の起伏はあつた事と思ふけれども、又瓢骨、圭石等の先輩が多少はあつたにしても、殆ど今日のブラジル俳句界を創設したものは念腹君の力といつてよからうと思ふ。布教の上で布教師や伝導師といわれる者が、如何に辛酸をなめるか。それと同じく俳句をひろめる上に於いてもまた相当の苦しみをせねばならぬことは当り前の事である。然し彼は殆んど休む暇もなく遠距離の各地を廻つて、常に俳句の布教（？）に携つておると聞く。

彼の素裸にして強靱な性格は克く困苦に堪えて今日に來たものと思ふ。

日本内地の俳句界の或人々の影響を受けて、たまに念腹君に反対する者も生じたようであるが、念腹君は一向それらに頓着なく、己れの信ずる所を敢然として押し進む事によつて、それらの人も何時の間にかその傘下に帰依したといふことを聞く。

強東風のわが乗る船を見て來たり

念腹

此の句は日本を離るるにあたって、如何なる船であるか、その乗る船を見てきたといふ句である。心は雄図に燃えながら多少の心細さ淋しさも、伴つてゐるその時の心持を想像することが出来る。旅中の句に、

シンガポール

日曜や扉に凭れ昼寝人

印度洋

むらさきの流星垂れて消えにけり

念腹

この二句の如きは誰も航海をする時に経験のあるぼんやりとした日々を送りながらもその心の底には一抹の淋しさを蔵するものといへる。

かくの如く一々句を点検していったならば際限ない事であるが、試みにブラジルに渡つて後の牛馬に關する句を二三句抜き出してみれば、

夏草や投縄牛を獲つつ行く

切株に木菟ゐて耕馬不機嫌な

どやしたる耕馬かなしく鼻取りぬ

犬居りて牛喜ばず牧焚火

早魃や牧馬も斃れはじめしと

馬にのる拍車結へし跣足かな

馬の背の籠にあたりて燕来る

転耕を見送るや馬とばしつ

干布囲野狩の牛の戻り初む

肉馬車を追うて地を翔つ秋の蠅

耳削ぐも風邪の年の手当てとや

騎初を追う子倅の裸馬

春雷や二人乗ったる馬に鞭

花珈琲門入りてなお馬に鞭

念腹

これらはみな同じ牛馬でも日本とブラジルとは異った趣のあることを会得せしめるのである。

如何に念腹君の俳句が生を写し生を描くかといふ事はこれらの句を一見してもわかるのである。ブラジルの天地、かつ生活といふものをこれらの句によつて窺ふ事ができる。

ブラジルの生物は日本内地のものとは大分違ったものがあるやうである。たとへば蜥蜴といふものも

日本の内地で見る様なものではないらしい。

腹這うて犬も飽きたり蜥蜴狩

蛇蜥蜴からみ搏つなり草の中

投槍に飛びつく犬や蜥蜴狩

蜥蜴狩びっこの犬も勢子のうち

念腹

又、汽車そのものには変わりは無いにしても・それ
に関するものには、

豚の群退ひ立て移民列車着く

枯野より犬這入り来ぬ汽車の中

汽車へ来て菓子購へる枯野かな

陽炎へる線路へ汽車を降りにけり

念腹

の類で、日本内地の汽車よりも蓬かに趣を異にして
ある事を知る。これ等もブラジルの天地から彼が写
し取ったノートの絵である。

更にブラジルの天地に養はれつつある人間を描いた句となると左の如きものがある。

毛布背負ひ日覚時計さげてゆく
開拓のはてが籠編む夜なべとは
汗寒く恐怖なしつつ争へり
木蔭より人躍り出ぬ野路夕立
煉瓦工みな少年や春の風
ズボンの娘モンペの母と井戸端に
息白く言葉短かに気むづかし
老いてゆく犬に朝寝の妻若し
彼の背我を睨める焚火かな
汲み終へし深井にもたれ春惜む
深井汲む女かはりし蝶々かな
移民妻わらびを干して気品あり
汽車に会ひ牡蠣飯に又日本人
蚊食鳥ニグロ嫁とる灯の軒に
野焼人沼をわたりて集ひけり
ブラジル陋巷はなし新豆腐
襟巻きや神父と競う拓士髯

瓜漬を食ひ結飯食ひ珈琲飲む
病人も腹減りしとぞ草の餅

何れもみなブラジルに於ける特異な生活を想像する事ができる。写生の筆が鋭くして別に巧む事もなく、その心に映ずる所のものがそのままに句になつてをる。

彼に

虚子門に無学第一灯取虫

の句がある。夫子自身を言ったものか、或は他人の事か。試みに夫子自身を言ったものと解してみれば、自ら第一の無学を以て居るようであるが、たとひ書物を読む事はすくなくとも、彼はブラジルの大自然といふ大いなる宝庫を蔵してゐる。之は一大文章である。彼は写生といふ事を信じてをる。この信は堅い。これによって人を導き自分も進んでをる。彼の俳句を説く言葉は恐らく饒舌ではあるまい。極めて簡明なものであらう。曰く写生。

信あれば文は短し秋灯下　　念腹

昭和二十七年十二月九日　鎌倉草庵

